

工学博士村田治郎君、文学博士長尾雅人君、文学博士
足利惇氏君、高田修君、江実君、小野勝年君、藤枝晃君、

日比野丈夫君、梶山雄一君および西田龍雄君の「居庸

関」に対する授賞審査要旨

居庸関雲台は北京の西北約六〇キロメートルの地点にあり、元末に建築された過街塔の下部、拱門(門洞)の部分のみの残存したものである。門洞の天井、斜面、側壁等は、曼陀羅、十方仏、千仏、四天王等の浮彫、及び陀羅尼、造塔功德記等を内容とするランチャ、チベット、パクバ、ウイグル、西夏、漢など六体の文字の刻文によって、一面に覆われている。

この居庸関の遺構は、建築史学、仏教史学、考古学、言語学等から見て極めて重要であるに拘らず、内外学界において未だ十分に研究されていなかったのであるが、一九四三年に至り、村田治郎君を団長とする調査団の精密な調査を受け、更にその資料は、その後十数年に亘って、村田君及び長尾雅人君を中心とする二つの研究班により、綿密な討究を受けたのである。

村田治郎編著「居庸関」第一巻はこの研究の報告であり、村田治郎・藤枝晃編著「居庸関」第二巻は雲台調査の際の写真と拓本とを図版として編集したものである。両者相俟って調査研究を鮮明に人に伝えることが出来る。

第一巻の研究報告は二編に分たれ、第一編「居庸関過街塔」は、居庸関雲台の歴史的考古学的側面を分担している。即ち第一章に於て担当者日比野丈夫君は「居庸関の歴史地理」を問題とする。居庸関の地点は古来蒙古高原からする塞外民族の侵入に対して北京地方を防衛する第一の要害地であったが、元代になるとその性質が一変するに至った。蒙古人が中華に入り、大都(北京)を蒙古大帝国の首都としたのであるから、この関門は蒙古人がその故郷と交通する要地となり、更にチベット、西夏、ウイグル、インドなどの諸外民族との交通の要路ともなったのである。著者はこの点を力説して、雲台が防衛のための要塞としてではなく、むしろ円滑な通過のための過街塔として築かれた意義を明らかにしている。

第二章において担当者藤枝晃君は、右の如き意義を担った「居庸関過街塔の沿革」を明らかにする。居庸関は元帝國最後の皇帝によって、ここを通過する衆生の福祉のために建てられたものであって、その創建は大体元末の至正三年(1353)であろうという。

第三章において担当者村田君は「居庸関の建築」につき詳細な実測に基いて建築史的考察を施している。また、曾て存した台上の建築に関しても、残存している勾欄や礎石の調査に基いて、種々の想定を下している。

第四章においては、村田君が高田修君と共に「居庸関雲台の画像学」を論ずる。拱門に浮彫されている曼陀羅、四天王像乃至裝飾文は、明らかにその主要素がチベット系統であることを示している。従つてこれらは元代の仏教芸術のうち、年代の明らかかなものとして、規準的な意義を担い得るであろうという。

第五章においては、村田、小野勝年両君が「雲台浮彫細部の意匠」を論じている。仏像の服飾及び持物の様式は、

元代一般に使用されていた服飾や什器を研究する好個の資料になる。また、そこに用いられている文様の意匠は、元代の特色を遺憾なく發揮している。その花唐草は全部同時代に彫作されたこと疑いのないものであるという。

かくして第二編の最後において村田君は、再び年代の問題にふれ、居庸関過街塔は元代末期になお浮彫を完成していなかったこと、明の正統十三年(1442)に至って浮彫は完成されたが、その時には台上の三座塔はすでになかったこと、従って嚴密に言えば居庸関過街塔完成の年時はなかったことを論じている。また、浮彫の莊嚴については、中国のラマ教の彫刻を始め、チベット、ネパール、カシミール、インド等の宗教彫刻が、彩色又は金箔を以て莊嚴するのを常としていることから推して、居庸関の浮彫も曾てはそうであつたらうと推測している。

次に第二編は「門洞内刻文」の研究である。まず第一章「刻文総論」において長尾君は、東西両壁に記されたランチャ、チベット、パクパ、ウイグル、西夏、漢などの六体の文字の刻文のうち、大字の部分は二種の陀羅尼を、小字の部分は造塔功德記を記せることを明らかにし、まずその陀羅尼について考証している。それを受けて藤枝君はその六体の文字や、それに關する従来の研究、所挾の拓本などを考察する。

第二章はその「刻文大字」の研究である。即ち同一の梵語陀羅尼が六種の文字によって記されていることに關する研究である。ランチャ梵字とチベット文字については長尾君が、蒙古の国字たるパクパ文字については西田龍雄君が、古くトルキスタン等で使用されたウイグル文字については江実、藤枝両君が、西夏文字と漢字については西田君が、それぞれ考証している。それによって足利惇氏、長尾、梶山雄一の三君は、居庸関陀羅尼の校定本文を作ることが出来た。

第三章は「小字刻文」の研究であるが、この刻文はほぼ同様の内容を持った造塔功德記を、梵語以外の五箇国語によつて記してあるのであるから、居庸関過街塔の由来を知る上のみならず、この五箇国語の言語学的研究の上にも、極めて好き資料を提供する。そこでチベット文は長尾君が、パクバ文と西夏文は西田君が、ウイグル文と漢文は藤枝君が、湮滅の甚だしい刻文の解説にとめたのである。

以上を通観すると、この書は第一編において、建築史学、仏教史学、考古学等各方面から居庸関過街塔に詳密な觀察を加え、この書を繕くものをして居ながらに全貌を窺うことを得しめている。まさに前人未開拓の一分野に深く蹊を入れ、多大の成果を収めたものといつてよい。が更に第二編においては、門洞内六体大字刻文並びに五体小字刻文の完全な校合によつて、初めて総合的解説の基礎を固め、従来不明であつた過街塔造営の由来を詳かにしたと同時に、同じ音写或は同じ造塔功德の表現でありながら、各言語の相違はまた、各民族伝統の独自性を明示しつつ、なお、且つ互いに同化発展して行く過程を、この居庸関過街塔の壁面にとらえて如実に知ることを得しめている。まことに緊密な協同作業の偉功である。中にも西夏文字・西夏語は、実にこの居庸関刻文によつて初めて学界に知られたものであり、その刻文の大体の意味は想像されながら、一字一字の音価、音韻組織は未だ言語学的に精確に知られていなかったのであるが、本研究によつて初めて明らかにすることを得た点も頗る多い。この業績は世界の学界に貢献するものといつてよい。